或本の反歌二首

四二四番

こもりくの　泊瀬娘子が　手に巻ける　玉は乱れて　ありと言はずやも

四二五番

川風の　寒き長谷を　嘆きつつ　君があるくに　似る人も逢へや

柿本朝臣人麻呂、香具山の屍を見て悲働びて作る歌一首

四二六番

草枕　旅の宿りに　誰が夫か　国忘れたる　家待たまくに

田口広麻呂の死ぬる時に、刑部垂麻呂の作る歌一首

四二七番

百足らず　八十隈坂に　手向けせば　過ぎにし人に　けだし逢はむかも